

---

# 藍色の枷

真沙也

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

藍色の枷

### 【Nコード】

N2925H

### 【作者名】

真沙也

### 【あらすじ】

喋ることの出来る大剣と生まれつき戦いの才を持った青年。そして旅の途中で出会う仲間達・・・強大な敵に立ち向かうファンタジーです。

## 1話 流浪の旅

俺は・・・無力だ。あいつが助けを求めているも、何一つしてやれなかった。

そしてあいつは死んだ・・・

「1話」 流浪の旅

時代は今から30年後、エルグ大陸では人びとが文明の理を生かした武器を用いて、大陸の覇権をかけて争っていた。

なぜ争いが起きるのか？理由は簡単だった。それは国を束ねる国王達が皆、自分が一番強いんだということを示したかったからだ。

国王達は、自分の国の内政など二の次で各地から腕利きの兵士や傭兵を雇い、武力ばかり強化していった。

そんな戦いのことしか頭にない国王達のどうしようもない時代に彼は生まれた。フォルシオン・カージス。

名前になんとなく神々しさを感じる青年フォルシオン。

彼には、生まれつき戦いの才能が芽生えていた。2歳で剣を握り、6年の兵士学校を1年で卒業した。

そして今、彼はどこの国の兵士にもならず、流浪の旅をしていた。

この物語はフォルシオンの周りでおきた出来事を綴ったものだ。

+++++ 枯れ果てた大地に一人の青年がいた、彼の名はフォルシオン。青い髪と目が特徴的で、背中に人ほどの丈がある大きな剣を担いでいる。

「ここもか・・・」

彼はまるで誰かに話しかけているかのように独り言を言った。

「どうした？相棒」

どこからか人とは思えないような声が聞こえた。

「いや、この国も国王のせいで、こんな枯れ野になってしまったのかなと思って・・・」

「おそらくはな。だがお前が気にすることではない。この国はすでに滅びている」

どうやら声の正体は、フォルシオンが背中に担いでいる大剣だということが分かった。「そうだけども、俺、なんだかやるせない気持ち

ちにさせられるんだ。国王達は絶対に許せない、絶対に間違っている！」

「・・・とりあえず旅を続けよう、フォルシオン」

「え？・・・ああ、そうだな。ごめんな、ビッグバン」

青年フォルシオンと大剣ビッグバン。二人は長い間旅を続けている。旅の目的もなく、ただ今のどうしようもない時代に落胆しながら。

彼らは今いる枯れ野から東に向かって歩いていけば、1日で大帝国アルに着くことが分かった。

フォルシオンは大帝国アルに向かって歩きはじめた。

+++++

歩きはじめてどのくらい経っただろうか。彼らの視界に一軒の家が写った。

「何だろう？こんなところに、一軒だけ立っているなんて・・・」

「さあな」

ビッグバンは興味なさげに答えた。

「中にかくして入れてもらおう？ビッグバン。たまには小休止も必要だ」

ビッグバンは、

「ああ」と短く答えて、それっきり何も喋らなくなった。

フォルシオンは家の入り口の前に立ちドアは二回ノックした。

するとドアの向こう側から誰かが歩いてくる音が聞こえ、しばらくするとドアが開いた。

「はい？どちら様ですか？」

ドアを開けたのは、中年の男性だった。茶色の民服に身をつつみ、長い髭を蓄えていた。

「あの・・・俺達、アイン帝国を目指しているんですが、しばらくここで休ませてもらいたいんです」

「俺達？おかしなことをいう子だ。私には君一人しか見えないが・・・」

そう言つて男性は首を傾げた。しかし、すぐに笑みを漏らした。

「まあいい、入りなさい。」

「ありがとうございます！」

フォルシオンは男性に一言礼を言つて、家の中に入った。

家の中は外見にくらべるととてもなく広く感じた。  
物が少ないせいもあるが、何より個人に与えられた空間が広い。そ  
れはフォルシオンにとっては嬉しいことだった。

## 第2話 枯れ野のサイエンティスト

「私の名前はカリム。よろしく」

そう言つて男性はフォルシオンに右手を差し出した。

フォルシオンはビッグバンを背中から降ろし、自分の左手を差し出して、握手に応じた。

「俺はフォルシオン。剣の名前はビッグバン。よろしくお願いします」

「フォルシオン君と、ビッグバン・・・剣に名前をつけるなんて、面白い子だね」

そう言つて、カリムは笑った。

「さあ適当にテーブルに座ってくれ、せっかく来てくれたんだ。紅茶でも飲もう」

フォルシオンとカリムは紅茶を飲みながら色々な話をした。カリムによると、この辺りも枯れ野になる前は商業国家として栄えていたそうだ。

ただ、やはり国王が内政をおろそかにしたため、力の無い民たちは、国を出ていかざるを得ない状況に陥ってしまったらしい。



そして、国王が死ぬと各地から集められた兵士達は新たな雇い主を探して違う国へと渡ったため、この国には誰も住めなくなったそうだ。

「・・・カリムさんは何で今でもここに居られるんですか？」

ふと疑問に思ったフォルシオンはカリムに質問した。

「私は、生前の国王からこの国の永住許可を貰ったから、今でもここに住んでいるのさ」

「永住許可??」

「ああ、国王に自分がこの国に不可欠な存在だと認めさせれば、貰えるものだったんだ。永住許可を貰ったのは私含めて三人、後の二人は国王が死ぬとすぐに放棄して違う国へと渡ったよ」

「カリムさんは何でそうしなかったんですか？」

カリムは困ったような顔して少し考え、こう言った。

「罪滅ぼしのため・・・かな？」

「罪滅ぼしですか・・・」

「ああ、罪滅ぼしのためだよ。国王の暴走を止められなかった自分に対してのね」

「そうですか・・・」

「だから私はここが枯れ野になってもこうやって住んでいるんだ。命が続く限りこの国と運命を共にすると決めたからね」

フォルシオンはカリムがどうして永住許可を貰えたのかは知らなかったが、最後まで自分の国を見捨てない・・・

それは素晴らしいことだと思った。移住が進む、この時代で、カリムのような考えをもつ人間はそうそういない。

「カリムさん、いろいろとありがとうございました。そろそろ、旅に戻ります」

「ああ、そうだね。そうした方がいい。暗くなると、この辺りは何も見えなくなるからな・・・」

そう言いながらカリムはキッチンの奥へと消えていった。

フォルシオンはその間に、ビッグバンを背中に担いで、辺りを見回した。

カリムの家の壁掛けには写真や、賞状、銅製の短刀などいろいろな者がかかっていた。

しばらくそれを眺めていると、カリムが小さな包みを持って、戻ってきた。

「これは、私の作ったものなんだが・・・良かったら持っていてくれないか？」

そう言われて、フォルシオンは手渡された小さな包みを開けてみた。包みの中はとても小さな黒曜石にタイマーが埋め込まれたものだった。

「何ですか？これは？」

「時限爆発だよ。いわゆるトラップさ。この辺りには手強いモンスターが出現するからね。戦闘の役に立てばいいんだけど」

「ありがとうございます・・・」

フォルシオンは時限爆発を懐にしまい、カリムに礼を言った。

「どういたしまして。じゃあ、道中くれぐれも気をつけて」

「はい、またいつかここにもお話を聞きにきます」

「ああ、待ってるよ」

そう言っで、カリムは手を振った。フォルシオンは手を振り返しながら家の戸を閉めた。

「結局、奴は何者だったんだ？」

ずっと黙っていたビッグバンが、背中でフォルシオンに聞いた。

「枯れ野のサイエンティストってところかな？あの賞状は科学者に送られるものだからね」

「また、ここに戻ってくるのか？」

「ああ、理由はないけどいつかきつとね・・・」

そう言っで、フォルシオンは歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2925h/>

---

藍色の枷

2010年10月9日04時32分発行